資料２

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第２８回）
Ｒ３．３．２３

過去の検討会における高松塚古墳壁画保存管理施設(仮称)に関するご意見

　これまでの検討会において各委員より新施設に関するさまざまな意見が出ており、以下のように整理してみた。

【具体的な発言】
第２回
佐藤委員：キトラ施設ではあるけど「全国あるいは世界の壁画古墳の調査研究をリードする施設になってほしい」

第１５回　在り方の内容に盛り込まれた内容として
「墳丘の整備、壁画・石室の保存管理・公開を行うための施設、将来の壁画・石室を墳丘に戻すことを可能にする保存管理の研究等の在り方について検討すること」
各委員から
木下委員「例えば壁画館や壁画センター、もっと総合的な飛鳥古墳館など、そのような施設の早期の設置」
和田委員「装飾古墳全体の保存あるいは管理について調査研究する部分はあった方がよいと思われる」
宮下委員「壁画古墳、壁画文化財の保存に関する研究センターをおいて世界に発信するようになってほしい」
佐野委員「高松塚古墳問題をこれだけ検討してきてさまざまなことも分かってきたが、まだまだこれから研究を続けていかなければならない。そのために研究センターが必要である。それと公開する施設とを一緒に同じ場所で考えようとすると大変難しいと思われるため、元々の高松塚古墳の近くに史跡としての一体感というものも持った公開施設を作ってもらいたい」
森川委員「古墳のすぐ近くで一体的に保存管理しながら公開展示を前提とした施設を作ってほしい。・・・・・高松塚古墳壁画も一体的に感じられるような施設、管理センター、壁画センターを作ってもらえれば、村側も様々な方への情報発信、例えば教育旅行をしたり、既に 4 カ国語対応のものがあるがナビゲーションシステム、バーチャル飛鳥京のようなものを作ったりしていきたいと思っている」
これらのような意見をざっくりまとめて、在り方の中に取り込んでいる。

第１７回
泉委員「展示に当たっては、シミュレーションなりデジタル画像なりを使って見てもらうというやり方になると思うが、その時に、絵師が見た目でどのように描いたのがとう視点があってもよいのではないか。古墳の中にあった状態で見た人は、濡れ色の状態でとても色が映えて見えたと話をされている。そのような点をどのように画像として復元すればよいかなどの工夫を検討してもらいたい」

第１８回
佐藤委員「高松塚古墳壁画の保存管理・公開施設については、その施設を見ただけで、高松塚の現地に行かずに帰るということがないようにしてもらえるとよい。また、保存のための調査や研究はこれからも続くと思うので、本日の会議で説明のあったそれらに係る緻密な検討の過程などを発信できる機能を有する施設であってほしい」
建石「一応の修理を終えて展示に供することができる状態まで持っていき、長期的に見れば折々に本格的修理ということにもなる。日々の話であればメンテナンスを行うことになるが、メンテナンスであれば狭いスペースでよいという話ではないので、今後検討いただく高松塚の施設についても、現在の仮設修理施設の修理作業室と同じくらいのスペースを確保する必要があると思っている」
森川委員「牽牛子塚古墳で発掘されて、現地に置くことができないようなものがあれば、高松塚の施設に置いてもらいたいという思いさえ持っているぐらいである」

第１９回
佐藤委員「高松塚古墳の保存管理・公開施設は、キトラ古墳の保存管理・公開施設ともリンクする。保存科学や学芸的な機能もあってほしいと思うが、それぞれに博物館を造るのは今の御時世で難しいと思うので、各施設を連携させて、それぞれを周り、理解していただき、既存の例えば飛鳥資料館や橿原考古学研究所など近辺の調査研究学術施設ともリンクすることも考えてほしい」
宮下委員「作業のデリケートさなどもあり、何とも言えないが、作業や調査の風景、あるいはその手元を拡大して映像に出すといった、リアルタイムで作業を見せることは、検討課題にいれてほしい」
森川委員「保存管理・公開施設を造るのであれば、研修機能・教育機能を兼ね備えてほしい。（中略）日本の終末期古墳の古墳センター的なもの、あるいは東アジアの古墳壁画を世界全体の中で見られるような機能・・・・（中略）まるごと博物館の入口に当たるところ。その玄関口として古墳群、あるいは飛鳥時代の歴史そのものを展示するような機能も・・・」

第２０回
森川委員「明日香村全体を歴史展示する中にこの施設も位置付けていきたいという思いがある。是非、検討いただきたいことで、古墳壁画がアジア全体、あるいは日本の歴史の中でどう位置付けられているかを分かっていただくような展示の在り方についてもう少し書いていいただきたいと、ずっと思っている。調査研究機能をもう少し強調してほしいとの気持ちを申し上げたところ、文字を入れていただいた。東アジア全体をもっと学んでいただけるような用意が必要だという思いを強くしている」
佐藤委員「日本の壁画古墳全体、それとアジアや世界の同じような壁画古墳も理解できるような、特にアジアの壁画は日本列島に直接影響を及ぼしたものだと思うので、そういった視点も必要だ。展示については、保存のための苦労を紹介したり、保存科学の成果を発信する機能を持たせてはと思った」
西藤委員「キトラの展示室を見せていただき，お墓の匂いがしないと感じた。古墳の

本質は葬送儀礼の意味が含まれ、キトラはこれとしても、特に今度高松塚の公開施設をつくられるときにはお墓の意味を伝える必要があるのではないか」
小林委員「手で触れるような展示など全ての人に開かれた情報発信の姿勢をもう少し進めてよいかと感じた」

第２４回
宮下委員「外国人向けの、あるいは子供向けのそういった施設、設備は進んでいると思うが、今後は視覚障害者に向けての発信も考えるべきなのかと、」
佐野委員「現地に行って体験できることの魅力と、ウェブによる周知と、うまく両輪で動かしていくことが今後の文化財の活用ということでは重要なのかと思う」

第２６回
小林委員「四神の館も、3 年間で 40 万人という大変立派な数ではあるが、明日香村への観光客数はそれどころではない。では、その差はどうしてなのか、というところで検討すべき要素はある。例えば、青龍や玄武を基にしたポケモンキャラクターや、里中委員のストーリーなどの力を借りながら大胆な展開を行ってゆく必要がある」

第２７回
佐藤委員「新施設の位置づけは、保存管理だけではなく保存管理・公開・活用ではないか。また、はぎ取り展示などは迫力ある立体的な展示を目指してほしい。さらに、飛鳥資料館やキトラ古墳壁画体験館四神の館、橿原考古学研究所附属博物館など周辺施設とうまく連携してほしい。」「最終的に高松塚古墳壁画を元のように石室に戻すための調査研究機能を加えることを検討いただきたい。また、壁画保存に関するノウハウを蓄積し、保存科学的に世界をリードできる施設にしていただきたい」
森川委員「新施設は当然保存の機能を有するが、公開するという位置づけを強くうたっていることを認識いただきたい」
和田委員「調査研究の機能を加えられるよう、予算を獲得して進めてほしい」